

2016年3月期第1四半期決算 電話会議 主なQ&A

Q 第1四半期に山陽新幹線が好調だった理由をどのように分析しているのか。

A 山陽新幹線の運輸収入は対前年104.9%となった。ご利用状況は平休日とも対前年約106%であり、ビジネス、観光需要とも好調と見ている。昨年の消費増税後のご利用減の反動に加え、ビジネスについては、好調な景気動向が中小企業や関西・中国地方にまで波及していることが要因として考えられる。一方、観光については、円安や株高による資産効果を背景にした国内旅行や訪日観光客の増、アクティブシニアの需要増が要因と考えられる。

ビジネス、観光とも、こうした外部要因の追い風を取り込むべく、ネットユーザーの層の拡大、おとなびの導入やインバウンド向け商品の拡充等を実施したことも奏功したと見ている。

Q 北陸新幹線の実績はどうか。

A 北陸新幹線の運輸収入は、開業特需や善光寺御開帳の効果があつたことに加え、開業効果の最大化を目指して、コストをかけて様々な取り組みを展開した成果もあり、予想ペースを上回る116億円となった。特に首都圏との流動は、上越妙高～糸魚川間のご利用状況が開業前の3.3倍と好調に推移した。

なお、並行在来線の経営分離に伴うその他在来線の減収▲39億円があるため、増収効果は76億円であった。

Q 通期の運輸収入の見通しを上方修正しているが、どのような考え方に基づいて修正したのか。また、北陸新幹線についてはどうか。

A 単体の運輸収入については、第1四半期の基礎トレンドが第2四半期まで続くと考え、上期の見通しを上方修正している。これは、当社の施策効果が、円安、株高、韓国でのMERS流行による外国人の旅行先の日本へのシフトといった外部要因を追い風にしている面があり、上期中は第1四半期の好調さが持続するという考えに基づくものである。一方、下期は期首予想のままとしているが、これは、韓国のインバウンドのMERSからの立ち直りに加え、中国経済など不透明な海外情勢が大きく動く可能性も否定できないと考えているためである。また、北陸新幹線の運輸収入についても同様の考えの下、第2四半期が第1四半期とほぼ同じ実績になるであろうという前提に立って、修正を行っている。

Q 単体の営業費用の見通しを50億円増額しているが、今後の収入動向次第で、更に費用を上積みする可能性はあるのか。

A 今回、好調な運輸収入をしっかりと支えていくために、第1四半期で奏功した北陸新幹線の好調を維持するための北陸エリアのマーケティング強化等の継続実施や、北陸新幹線のご利用増を支えている周辺線区への地道な安全安定対策の実施により、単体の通期の営業費用の見通しを50億円増額した。

今後、仮に収入が上振れすれば、更なる増収を確たるものにしていくための費用等の上積みをする可能性もあるが、具体的内容については、現時点では何とも申し上げられない。

Q ノースゲートビルディング西館を百貨店からSC化したが、これが今期の営業利益に与える影響はどの程度か。また、ノースゲートビルディング東館と合わせたルクア大阪の業績の推移はどうか。

A 流通業の利益改善と不動産業の利益改善の大半が、ノースゲートビルディング西館の再生によるものである。

ルクア大阪については、第1四半期の売上は堅調に推移、来館者も以前とは見違えるようにお越しいただいており、東西両館一体での運営効果が出ていると考えている。ただ、開業から少し時間が経ち、売場ごとの濃淡が出てきており、色々なチューニングを始めているところである。激戦区の梅田で簡単に勝てるとは考えておらず、引き続き、様々な努力を継続して、当初の年間770億円というテナント売上の目標達成に向けて取り組んでいかなければならないと考えている。

Q 第1四半期のインバウンドの実績はどうか。

A 鉄道についてはインバウンド向け商品の販売枚数が対前年7割増と目標ペースを大きく上回って推移している。関西に加えて西日本各エリアへの商品のご利用の伸びが大きく、当社のねらいに沿った動きになっている。また、百貨店の免税取扱額やホテルの外国人宿泊額も目標ペースを上回るなど、グループ全体として好調に推移している。

Q 好調な業績を踏まえ、営業キャッシュフローは上振れることが想定されるが、その使い道についてどのように考えているのか。

A 営業キャッシュフローの上振れ分は、従来より開示しているキャッシュの使途の優先順位に従って、まずは安全・成長投資、次に株主還元、最後に債務削減の順に使っていくことになる。